

棺を焼く

口演 茅々斎かちかち

宋の都は江戸よりも江戸らしく。そのように申すやら申さぬやら……。

宋の都といえますと、北宋時代の開封と、南宋時代の臨安りんあんの二つがございませうが、どちらも江戸と同様に人口が百万を超えたといわれます。商業活動が大変にさかんで、ほかの時代に比べて上からの統制が緩やかで、庶民は割と豊かにのびやかに暮らしておりました。江戸との類似点は確かにたくさんあったようでございます。

我がお江戸の人々は、あちらの国の書物をよく読んでいまして、これはおもしろいと感じますと、舞台をお江戸に置き換えて語り直すというようなことをよくしていました。お江戸の文芸はあちらのものを接ぎ木の台のようにして新たな花を咲かせたといってもまあよろしいでしょう。そして、明治からこっちの文芸渡世人は、そこに新たな趣向を付け加えて江戸を語ってきたのですから、いかに

も江戸と思うものの根元が実は宋の都にあったなどということもなくはないのでございましょう。

本日は流行り病のお話でございませう。

医術というものは、それこそ江戸も宋の都も似たりよつたりでありました。オランダから西洋医学が入ってくるよりも前は、もっぱらあちらの国より医術を取り入れていたわけですから、似ていて当たり前でございませうな。

宋の時代の医者には、坐医と游医という区分がありました。坐医は診療所を構えて病人を診察し、医書に通じて技術的にそれなりのものがあり、治療費はそこそこ高くつきました。游医は診療所を持たず、外を回って病人のところに出向き、

治療費はお安くすみましたが、技術はおおむね低く、決まりきった薬を与えたり、針灸を施したり、あるいはまじないをしたりと、素人療法よりはいくらかましといった程度であったようです。

ここにせんじょう単驤と申す人がございました。偉いお役人になろうとかきよ科挙の試験に挑みましたが落第が続き、つらつら考えますに、「ここはひとつ医術の方で身を立てるとしよう」と心に決めました。いまでいえば、公務員試験に失敗したので医者にもなるかというのはずなのでしようけれど、単驤先生は学問を積んで難しい本が読めますから、『こうていはちじゅういちなんききょう黄帝八十一難経』とか『そもん素問』とかの医書を読み漁りまして、うまい具合にその要諦を会得したのでありましょう、医者として開業するとすぐさまよい評判をとったのであります。たちまち堂々の坐医として都に一家を構え、とんとん拍子で皇帝に呼ばれるまになりました。

時の皇帝は仁宗じんそうと申しまして、数年前から風眩ふうげんに冒されてたびたび病に伏せ、幾人も御典医が治療にあたっておりまして。脑梗塞の発作を繰り返していたらしく、当時の医術ではなかなか太刀打ちできなかつたでありましょう。時に嘉祐かゆう八年三月、西暦でいいますと一〇六三年でございますが、またも皇帝は発作をおこし、御典医が薬を与えるやら何やらと手を尽しましたが一向に効き目がなく、すわ一大事かとなりましたときに、近ごろ都で評判の名医がいると誰か推薦する人がいたのでしよう、単驥先生ともう一人の医者が宮中に召し入れられました。

これで皇帝を治せば大変なご褒美がいただけで大出世間違いなしと、単驥先生、大いに張り切つて皇城に乗り込みました。お薬をさしあげるなどいたしますと、まことに運がよかつたのですな、皇帝の病状はすつと落ち着いたのでございます。なるほど評判通りだと、単驥先生はたちまち皇帝の主治医となり、これまでの御

典医はあつさりクビでございます。

御典医と申しましたのは内侍省ないしに属する医官でありまして、ほかの官員と同様に厳正な序列がございました。そこに単驥先生がいきなり割り込んできて上の方にいた者が追い出されてしまったのですから、当然怨みを買ったことでありましょう。ついでながら、医官の多くは、都で最も繁華な馬行街ばこうがいから少し北側に行つたあたりに居を構え、そのあたりには薬屋もたくさん並んでいました。医薬の町でございませぬ。

さて、皇帝はひと月ほどは小康状態を保っておりますが、ある日のこと、昼間は何でもなかったのが夜に入つて急に苦しみ出し、あわや一大事と、皇后が駆け付けますと、ものを言うこともできませんで、ただ胸のあたりを指差すばかり。単驥先生が大慌てで薬だ灸だといろいろと施しましたが、そのかいなく皇帝はあ

の世へおさらばとなってしまいました。

これで単驥先生の運命はたちまち暗転。治療に失敗して皇帝を死なせた罪で拘禁され、恐らくは死刑であろうと、しゅんとなってしまいました。クビとなった先の御典医たちが裏で画策もしたのでしよう、単驥先生の処分を巡ってごちゃごちゃがありました、最後は幸運にも、皇太后が救いの手を差し延べてくださいます、当初は治療の効果が実際にあつたのだから死を免してもよろしかろうと、遠くに流されるということですんだのでございます。

これに懲りまして、単驥先生は医術はぴたりとやめ、数年の逼塞を経て、今度は普通のお役人として復活を遂げたのでございます。

皇帝でありまして、この程度に頼りない医術を受けるしかなかったのでございますから、一般の民衆となりますと、街を巡ってあたかも行商人のように御用

を聞く游医にかかれればまだしも、あやしげな民間療法やもつとあやしげなおまじないに頼るばかりでございました。

ある春のこと、あるお寺でお祭りがございまして、近郷近在から人々が集まってきたてきました。一艘の舟に乗り合わせて到着した一団の中に、

「旦那、申し訳ありませんが、あつしは、今日はこの足の調子がことよろしくありませんで、ここでお帰りをお待ちするといふのはいけませんでしょうか。」

「また痛み出したのかい。そいつはよくないなあ。せつかくここにまできたのに。まあ、私一人で行って、そなたの分も祈ってきてやるとするか。」

どこかのお役人様の息子さんでございましょうか、身なりのよろしい若者と、

そのお供の初老の男がこんな話をしております。

お供さんはさも痛そうに足をしきりにさすっておりますので、船頭が、

船頭「どんな按配でございましょうか。はあ、はあ、刺すような、それはそれは、お気の毒でございませう。聞けば聞くほどうちの親父どのにそっくりでございませう。なあ。それでしたら、よおく効くお薬を存じ上げております。親父どのはそれでけるけろっと治りましてございませう。」

主人「ほう、それは耳よりの話。医者に診せても一向によくならず、こうやってときどき難儀します。そのお薬とやらを教えてくださいたくわけにはまいりませんでしょうか。」

船頭「お安い御用です。ちようどよろしゅうございませう。あのお寺の裏山からちよつとばかり深く入った谷に、まさしくいま時分に生えてくる草がこの病の一番

のお菓なのでございます。草を採ってきて、酒に一晚浸して飲めばよろしいので
す。生えているところもあつしが万事心得ております。いかがでしょうか、祭り
見物の足で、ちよいと採ってきてさしあげましょう。造作もないことです」。

主人「これはこれはかたじけない。そうしていただけるとまことに助かります。お
礼はできる限りのことをさせていただきます」。

主人とお供は、これは何たる幸いと、船頭に前金を渡して、くれぐれもよろし
くと頼みます。

舟は翌朝出発というので、人々は祭りへと出かけて、お供の男が痛み能耐えつ
つ伏せつて一人舟に残ります。

主人は誰よりも早くに帰ってきました、見物客目当ての露店で買ったものを
供の男に食べさせるなどしていきすと、ぼちぼち暗くなってきたところに、船頭

がふらりふらりと足元もおぼつかない様子で帰ってきました。思いがけず銭を得て、どこかでしこたま飲んだのでありましょう。しかし、感心なことに約束は忘れませんで、手にはひと束の草を掴み、腰には酒の入った瓢箪をぶらさげております。

川の水でばしやばしやと草をすすぎ、供人の持つ木の椀に入れ、根の部分を箸でぐさぐさと刺してから酒を注ぎ、

船頭「これでよろしゅうございます。朝になったら一気にお飲みなさい。嘘のように傷みが消えましょう。あつしの親父どのもそうでしたから」。

主人とお供が礼を言う間もなしに、船頭はごろりと横になるとたちまちの高軒でございます。

お供は椀を大事そうに抱え、痛みはひどいし、一刻も早く飲んで治したいとの

思いから、まんじりともいたしません。

ようやくあたりが白々としてまいりますと、もうそろそろいいのではと、椀の内をのぞきこみます。ぷーんと酒のかおりが鼻をくすぐります。もとより酒は好きでありますから、早く楽になりたいと、たまらずひと口飲みます。にがいことはにがいけれど、酒はちよいと結構なものようで、ぐいぐいとたちまち飲み干してしまいます。すぐにからだがぽおつと温かくなり、痛みがうすれたような気がします。

供人「これはいい」。

一人うなずいて、船頭が言ったように、けるけるつと治るのを期待して、明けゆく空を見上げておりますと、きりつきりつと胃のあたりに刺すような痛みが走ります。思わず腹を抑え、それでも、

供人「いやいや、これは薬が効いてきているせいだ。」

と、心の内で思つて我慢します。

しかし、痛みはひどくなるばかりで、体をねじつて苦しみ出します。そのうちにもう足の痛みどころではありません。腹の中は煮えくりかえるばかり。どうにも耐えがたく、とにかく腹中のものを出してしまおうと、船べりから顔を出し、げえげえと吐こうとしますが、にがい汁が少しばかり出てくるだけです。

若い主人が目を覚まし、あわてて背をさすつて介抱します。

お供は船べりをつかんで身を硬直させ、

供人「うん」。

一度うなると、そのまま息絶えてしまいます。

主人「やい、船頭、起きろ」。

いまだ高野の船頭を蹴飛ばし、それでも起きないので顔を強く叩いて目を開かせ、

主人「おまえが殺したんだ」。

と、怒鳴ります。

船頭は目をこすって、ひっくり返っている供人の顔をのぞき、謝るところか、逆に、

船頭「何をばかなことを言っているんです。せっかく親切にしてやったのに、何だつていちゃもんをつけるんですか。けったくそわるい」。

酒臭い息で食ってかかります。

主人「おまえの薬を飲んでこうなったのだ。おまえが殺したんだ」。

船頭「冗談言っちゃいけない。あつしの薬はこの草、この草です。違うものを飲ん

だんだんか、旦那が殺したんだか知らないけど、あつしのせいにして、ゆすろうとでも言うんですかい。ちかごろ、まったく油断も隙もあつたものでない」。

主人「飲んだのはおまえが作った薬だ。椀の内に草があるではない」。

船頭「ぼかばかしい因縁を付けられたんではたまらない。この草はこうやって」。

と、残っていた草を昨夜と同じように箸でぐさぐさと刺して酒を注ぎまして、

船頭「本当はひと晩待つただけれど、難癖をつけられて、おとなしくしていたら、あらぬ罪を着せられてしまう。おっつけ船を出さなくてはならんし、とても待ちやいられない」。

しばらく椀をゆらしながらさんさんに悪態をつき、この騒ぎに目を覚ました一堂に向かつて、

船頭「さあ、よろしいか、あつしが正しいという証人になってくれ」。

椀の酒を一気に呑み干し、

船頭「ああ、こいつはきく。無理やり起こされて、夕べの酒がまだ残っていて、頭ががんがん痛かったのが、すうつと消えていく。ほんにこれはいい薬だ。これを飲んで死ぬなんてそんなばかなことがあつてたまるものか」。

船頭はあれこれ言いたい放題でございましたが、急に顔をしかめ、腹を押さえ、身をよじつて苦しみ出します。舟べりから頭を出してやはりげえげえやりながら、ひとときわ苦しげにうなると、そのまま絶命してしまいました。

これは船頭が強い薬の処方を誤ったか、世にいう断腸草なるものを薬草と見誤ったかということであつたようです。断腸草は鉤吻こうふんとも申しまして、大変な猛毒を根に持つ草であります。

ついでながら、断腸草を使った自爆テロもどきの事件も時折にあつたようです

な。仇敵同士の家があつて、決着をつけてやろうと、一方の家の者が断腸草を自ら食らつてから、恨みのある家に押しかけて喧嘩をふっかけます。たちまち派手な殴り合いとなつて、その間に毒が効いてきてころつと死んでしまいます。喧嘩をふっかけた側の遺族はお上に訴え出て、相手の一家を殺人の罪で破滅させてしまふのです。検屍をゆるがせにすると、お役人は喧嘩で殺されたとあつさりどだまされてしまいます。遺恨を晴らすためなら我が身を犠牲にしてでもというのはいつの時代でもあるのでございますな。

民間療法にはこのように危ういこともございましたが、効かない代わりに危なくもないというのがおまじないでございましょう。どのようなおまじないがあつたのかと申しますと、蘇軾そしよくというたいへん有名な人が記した書物に、「天心てんしん正しょう法ほう」と、その名も立派なおまじないが記録されています。

それをわかりやすく訳しますと、

「あんたはいまにもおいらを死なせようとするけれど、おいらはこれまであんたを死なせようとしたことがない。あんたがもしもおいらに祟りをしないでくれたなら、おいらもあんたを苦しめるようなことはしない」。

病をもたらす悪い神様に向かってこのようなことを言うのです。お互い関わり合いなしでいきましようやということですよ。これで病が治ってくれたらまことに結構でありますな。

このような当時の医療の水準で、たちの悪い疫病でも流行はやって人がばたばたと死ぬようなことになったりしますと、有効な手段としてはせいぜい病人を隔離するくらいしかなく、あとはおまじないか神頼みでした。お上の方でも、その地を治めるお偉い人が身を清め、たくさんのものを神様に供え、病魔をどうか鎮めて

くださいと祈ったものです。民を愛する真心が天に通じて流行がぴたりと止んだなどというまことにうるわしい記録も残っております。もちろんそうしたことを書き残すのは文字を使えるお偉い方々でございますから、おのずとそのようなことになったのでありましょう。

流行り病はややまいでもしも一家の柱となる人が死にでもしましたら、生命保険も社会保障も何もなかった時代でありますから、たちまち悲惨な運命に沈み、その恐ろしさはいまでは想像もつきませんで、庶民はとにかく何かしらすかれるものがあればすがりついたのでありましょう。それをあてこんで、昨日まで何をしていたのかもわからないような連中が、病気を治すと称して游医ゆういやら巫医ふいやらになって錢を稼ぐなどということもあつたようでございます。

さて、ここにございますのはおなじみの王震屈先生おうしんくつ、今朝はどうも目覚めがよ
くありませんで、寢床から抜け出るのもなかなかの大儀。辻々を寒風が吹き抜け
る外の音に気が折れ、幾度目かの決意でやつとのこと起き上がったのでございま
すが、からだがひどく重く、ぞくつと寒気を覚えます。

王「これはいけない。やられか」。

不安に襲われ、

王「いやいや、これはいつものただの風邪だ」。

急いで打ち消そうとしますと、ちようど咳が出てきましたので、

王「そうだ、そうだ、やはりこれは風邪。風邪だ、風邪だ」。

自分を納得させるために、から咳をさらに続けます。

都では、冬の寒さがぐつと厳しくなったところから悪い病がはやり出し、昨日はあそこ今日はここと、病でまた幾人死んだとしきりに噂され、次は我が身かと誰もが恐れているちょうどそのさなかでございませう。

風邪であっても用心するに越したことはない、厚いものはおって墨をすり、「本日の手習いはお休み仕り候」と黒々と書いて、表の戸に貼り付けます。外の風はまことに身を切るようで、急いで引っ込んで、すぐにまた寢床にもぐりこみます。

いったん冷えたからだはなかなかあたたまりませんで、身をかたくして、がたがた震えながら、

王「これはいつもの風邪。じきに治る」。

と、自分に言い聞かせます。それでも、もしもこれがいまの流行りの病なら、

このままどうにかなくなってしまふのではないかと、つい弱気なことも考えてしまひます。

王「どうせ、死んだところで困ることは何もない」。

あたかも達観したかようなことをつぶやいてみますが、得体の知れぬ病にとりつかれたのではないかとの恐れは強くなるばかりで、

王「まったく意気地のないものだ」。

我ながら情けなくなります。

そうこうしておりますと、

「先生、どうかされましたか」。

がたごとと戸を勝手に開けて入ってまいりましたのは、おなじみの劉婆りゅうばあさん。

劉「おやまあ、寝込んでいらっしやる。貼り紙があるのでどうしたのかとのぞい

てみたんですが、按配がお悪いのですか」。

王「いやまあ、ちよつとばかりだるくてなあ」。

先生は寝たまま答えます。

劉「あらまあ、いやですよ。とうとう、先生までやられちゃったのですか」。

恐れているそのことを劉婆さんがずばり言つてのけましたので、

王「いやいや、違う違う。ここ二、三日はとくに寒いので、風邪を引き込んだだけだ」。

そう言つて、いかにも風邪らしく咳き込みます。

劉「まあそれならいいですけど」。

王「子どもたちとうつしてはいけないからな、今日は休みにした。寝ていればじきに治る」。

劉「手習いにきて、病氣をもらって帰ったのでは、割に合いませんやね。親御さんたちも、うちの子がいつ流行り病にやられたりしないかと、毎日気が気でないでしょう。どういうわけか、今度のは若い人や子どもに多いらしいですから」。

王「そうなのかい。だったら、これが流行りの病なら、私も若いということになるうかな」。

先生は、弱氣を隠してわざとそのように言います。

劉「そんなこと言っていると、それこそ若い人みたいに命を落としますよ。どんな具合かちよいと診てさしあげましょう」。

劉婆さんはずかずか入り込んできて夜具をめくり、王先生の脈をとったり顔に手を当てたりいたします。

王「なんだい、医者みたいなのをして、どうしたんだ」。

劉「みたいではなくて、あたしは立派な医者ですよ」。

王「へえ、そうだったかなあ。なるほど、いつものと格好が違う。にわか医者にでもなったのかい」。

劉「ずっと前から医者です。知りませんでしたか」。

王「知らんなあ」。

劉「赤ん坊だって何人も取り上げたことがあるんですから」。

王「そなたは器用だからそれくらいのができて不思議ではないが」。

劉「能ある鷹は爪を隠すで、先生はご存知なかったかもしれないが、若い女の病人にはあたしみたいな女の医者は重宝がられましょう、せつかくのこの腕前を隠してばかりいるのも何だと、この際、少しは人助けでもしておこうと、このごろはちよいと忙しくしております」。

王「まことに殊勝な心がけだ」。

劉「先生、疑っていますでしょう」。

王「そりやまあ、稼ぐためならと、そなたは何かと信用できぬからな」。

具合の悪いなかでも皮肉を言いますと、

劉「だったら、ここでちよいと治してみせたら、どうですか、あたしを立派な医者として見直してくださいますか」。

王「そりやまあ、ちよいとでもいいから、治してもらえたらそれはそれでありがたい」。

劉「まあ、任せてください」。

劉婆さんは自信ありげに胸を叩きますと、携えていた荷をほどき、きれいな布で大切そうにくるんだ二枚の絵札を手習い用の机の上に置き、それに手を合わせ

てから、勝手知ったる先生の住い、奥の竈かまどに火をおこしたり、小さな鍋に水をくんでその上にかいたり、盆に米やら豆やらを形よく盛って絵札の前に供えたり、一掴みの草をその横に置いたり、いろいろといたします。

劉「では始めましょうか。先生はそのままうるさいことを言わずに、口を閉ざしてじっとしててください。」

劉婆さんは床に片膝をついて絵札に向かって幾度も拝礼し、もごもごと呪文を唱え、また拝礼してから、小さな箒のようなものを手にし、王先生の寝床の上で、頭からつま先へと、何度も掃くような仕草をします。それを終えると、また絵札を拝し、呪文を唱え、また拝します。そして、草から一部をむしり取り、鍋に入れてさらに呪文を唱えます。それがぐつぐつ煮え出したところで椀に注ぎ、

劉「さあ、お飲みなさいまし」。

王先生はむっくり起き上がり、椀の内をしげしげと見て、

王「これは何を煎じたのかい」。

劉「疑わしげに見たりしないで、とつてもいいお薬ですから」。

ためらいがちに口に運びますと、かなり苦いけれども、何かよさそうな感じがいたします。

王「まあ、どうやらこれは悪くはなからうかな」。

劉「効くと思ってお飲みくださましな。うさんくさく思っておられるのでしよう。それでは治るものも治りません。あたしを信用してすっかり任せてくださらなければ」。

王「しかと観念して、そなたに我が一命を預けておるぞ」。

先生は残りを飲み干します。

劉「観念までしていただくほどのことではないですけど。あとはしばらく横になって休んでいてください。いまからお粥を煮てさしあげます。薬が効いてくるからだが暖かくなってくるでしょうから、眠くなったら寝ちやつてください」。

王「粥か。そいつはありがたい」。

劉「やっと札を言ってくださいました」。

王「さつき口を閉ざしていると言われたので、深く深く感謝しているこの気持ちを告げることができずにいたのだ」。

劉「ああ言えばこう言うのですから。とにかく、札も言わなくていいですから、おとなしく寝てくださいまし」。

劉婆さんは絵札に供えた米と豆を下げて鍋に入れます。

王先生はしばらくうとうとしておりますと、

劉「さあ、お粥が煮えました」。

薬のおかげか少しばかりからだが軽くなつたような気がし、ゆつくりと身を起してお粥を啜ります。

王「あの絵札は誰を描いたものなのかい」。

劉「ご覧になつてわかりませんか。右が玉皇大帝様（ぎやうたいてい）、左が扁鵲先生（へんじやく）です」。

王「ははあ。そなたが描いたのかい」。

劉「いくらあたしでも、絵の腕（うで）までは。柴先生（さいせい）の筆（ふで）です」。

王「柴先生（さいせい）というと、あの方術（ほうじゆつ）使いか。絵も描けたのか」。

劉「結構な腕前（うでまへ）でしょう。何でもできるあれだけの人ですから、いま一つうまい風に乗れたら、一気に羽振りがよくなりましように。そうなつたら、あたしごときのためにわずかな錢で絵を描いたりなんぞまるつきりしてくれなくなるでしよ

うけど」。

王「いまをときめくあの連中みたいに急に身分が高くなったら、そのときはうれしいのかもしれないが、風向きがちよいとでも変わったらたちまち奈落の底だ」。

ときの皇帝は大の道教好きでございまして、うまく取り入って大出世を遂げたあやしげな道士が幾人もおりました。

劉「それでも、一度は高いところに昇ってみたいのが人情でありましょう」。

王「こういう暮らしが一番気楽でいいのだがな」。

劉「先生だって昔はいろいろなすったから、そんな枯れたようなことも口にはできないではありませんか。本当に枯れたのかどうかは知りませんが」。

王「玉皇大帝様と扁鵲先生の絵札を作ったのはそなたの考えかい」。

劉「医者には信用させることが何より大事でございましょう。それで、柴先生が玉

皇大帝様と扁鵲先生がいいと選んでくださったのです。玉皇大帝様といえ、近ごろお上がいதாக崇めておられるのでございましょう。扁鵲先生は大昔の名医で名前くらいなら誰もが知っています。それに何代か前の皇帝が病気が治ったお札に宮中に扁鵲先生の廟をお築きになったのでございましょう」。

王「帝のご威光をお借りしようというのか。あの先生もそれなりに目端が利くのだな」。

劉「都には何百人だか何千人だか知りませんが、大勢の道士やら方術士やらがいるでしょうから、その中から頭一つでも抜け出ようとするにはちよいと目端が利くくらいではなかなか大変なのでしょう」。

王「今日はそなたに我が一命を預け、玉皇大帝様と扁鵲先生を龔頂の神様として、この病を治していただくでしょう」。

王先生は身仕舞を改め、絵札に向かって粥の椀を頭上に頂き、再びすすります。

あちらの国には遠い昔からたくさんの神様がいて、民衆はそのときそのときで靈力のありそうな神様にすがりつきました。神様は大きく分けますと、民間伝承の土着の神様、道教の神様、そして仏教の神様がございました。道教の神様は、唐から宋の時代にかけて序列が整理されて、三清さんせい、四御しぎよという七人が最も地位が高いというのが一般的となりました。玉皇大帝と申しますのは、四御の筆頭、つまり上から四番目の神様です。宋の歴代の皇帝はこの玉皇大帝をことに崇めまして、とりわけ徽宗皇帝きせうは熱心でありました。

顕著な実績を残した人が後に神様として祀られるというのはこちらの国もあちらの国も同じでありまして、扁鵲へんじやくと申しますのは超絶的な技術を持っていたとされる古代の医者でございます。

けいゆう

景佑元年といえますから、西暦にすると一〇三四年に、仁宗皇帝は病気になるじんそうました。先にお話しした仁宗皇帝が死んだのよりも三十年前であります。このとき治療に当たったのが許希きょきという人で、鍼や灸をいいますと皇帝はみごと全快、たくさん褒美が与えられました。許希は皇帝に拝謝し、次に西に向きを変えて、そこには誰もいないのに拝しましたので、

皇帝「何をしているのか」。

許希「我がお祖師様に感謝の念を捧げております」。

皇帝「祖師とは誰か」。

許希「扁鵲先生でございます。こうしてご褒美をいただけましたのもお祖師様のお蔭。そのご恩を忘れず、いつしかお祖師様の立派な廟を建てるのが某のささやかな宿願しゆくわんでございます」。

皇帝は許希の心ばえに感じ、皇城の西隅に廟を築き、扁鵲を靈心侯に封じました。これを機に扁鵲信仰がさかんになりまして、劉婆さんは柴先生の教えに従い、皇室に所縁のある二人の神様を描いた絵札を携えて、せつせと治療に出て歩いたというわけでございます。

三日ほどの間、劉婆さんは日に一度ずつ通って、そのたびに同じ治療を施しました。祈祷が効いたのか、薬が効いたのか、粥が効いたのか、どれがよかったかはわかりませんが、とにかくにも王先生は回復し、今朝は気分も随分とよろしくなりましたので、寢床を離れて火をおこし、それで暖を取りながら粥をことごと煮ておりますと、

劉「先生、いかがでございますか」。

返事をしないうちに早くも顔をのぞかせ、

劉「あらつ、起きておられる。もうよろしいんですか」。

王「おかげでな。今朝は北風も止んで、ぽかっと暖かくなってくれたし、これでもう大丈夫だろう」。

劉「それはよろしゅうございました」。

王「それでも念のために、手習いの方はもう二、三日は休みにしておこうと思っている。貼り紙はそのままだ。お上かみの方では、疫病にかかった者が家に三人以上いると、本人が病気でなくても、百日は宮中に入れないという決まりがあるそう
だ。こっちは百日も休んでいる余裕はない。そろそろ粥にするものも乏しくな
ってきてしまったしな」。

劉「いやですよ、先生のことですから、あたしなんかとは違って、十日やそこら休んだところで何も困ったりするはずありませんでしょうに」。

王「そうでもない。とかく内実は外からではわからぬからな。家の中はもうすつからかんだ」。

劉「本当にお困りなら、何か持ってきてさしあげましょうか。あたしは、いまはちよいとばかり羽振りがいいのです」。

王「世間が困っているときにそなたの稼ぎ時か」。

劉「人助けでございますよ」。

と、鍋の内をのぞき、

劉「そろそろ肉つ気のあるものでも召しあがってはいかがですか。病はもう峠を越えたようですから、薬も変えましょう。後で何かおいしいものを本当に持って

きますよ」。

王「いろいろとすまないな。すっかり世話になってしまった」。

劉「どうです、あたしを見直しましたでしょう」。

王「立派な医者としてそなたを認めるのもやぶさかでない。感謝する。ありがとう。いまは懐真合が許さんが、いつかたつぷりと治療費を払わんといけないだろうな」。

劉「いやですよ、先生からいただくものですか。日頃の分のお返しとして、これくらいではまるで足りませんでしょう」。

王「日頃私がなんぞしただろうか」。

劉「それはもうたつぷりと。だいたいこうして先生のところに入入りさせていただいているだけであたしの信用というものが違いますもの。女一人で生きるには、

何が大切といって、世間の信用です」。

王「私のせいで大事な信用を落とすことも逆にあるのではないのかな」。

劉「それはまあ世の中はいろいろですから、正直言つて、先生を褒める人ばかりつてわけではありませんけれど。でも、学問がおできになるといふのはやはり大きいです。世間体がとにかくよろしいですもの。あたしみたいなのは、まずうさしくさく見られて、努力に努力を重ねて少しずつ信用を築いていかないとなりません。ちよつとでも何かしくじると、いっぺんで全部を失ってしまつて、それこそすぐに足蹴にされてしまいます。早い話、昨日だつて、こっぴどく叱られて、さんざんだつたのですから」。

王「ほう、そなたでもうまくいかなひことがあるのかい」。

劉「うまくいかなひことだらけです。先生の前ですが、愚痴でもこぼしたくなり

ます」。

王「女の愚痴もなあ、色恋沙汰なら聞く気が湧くのだがな」。

劉「何ですねえ、嫌そうなお顔をなさらないでくださいな。色恋沙汰がお好きなら、あたしにだって、その昔は、十や二十はありましたよ」。

王「昔というのは、何だろう、唐の世の貴公子をたぶらかして、野原で馬の糞を食わせたとかいうのではないのかい」

劉「人を何百年も生きる化け狐みたいにしなideてください」。

王「叱られたのは、病人を死なせでもしたのかい」。

劉「今度のはとにかくたちが悪くて、どんなに名医だって、十人診れば四人や五人はきつと亡くなってしまいますよ。一家でほとんど全滅というのだったのです。運悪くそういう家に当たってしまったのですよ」。

王「運が悪いのはそなたではなくて、そなたに診てもらった家の方ではないのかい」。

劉「違いますよ。せつかく治してさしあげましたのに、そういうことおっしゃらないでください。本当にお口が悪いのですから」。

王「すまん、すまん。これもそなたが口の方まで妙に元気にしてくれたからだ」。

劉「お口が悪いのはもとからでございましょう」。

王「で、何があつたんだい。愚痴を聞かせてもらおうじゃないか」。

劉「いえね、あちらの家に最初に呼ばれましたのは、女の病人を診てほしいということだったので。お嬢さんを診てさしあげますと、快方に向い出しましたので、先方のおかみさんは喜んでくださいます、もう一人病人がいるということ、今度は息子さんを診てさしあげたのです。そこまではよかったです。その

後で新しい病人が出てしまつて、そして昨日ですよ、様子を伺いに行くと、なんとその新しい病人が夜中の間にもう亡くなつていたのです。いくら何でも早すぎると、それだけでびっくりなのですが、治りかけていたお嬢さんの具合がまた悪くなつていて、さらにもう新しい病人が出てと、とんでもないことになつていたのです。『これはどういふことなのですか、ちゃんと説明してください』と、おかみさんに詰問されて、あたしだつてわかりませんから、即答できずにいますと、おかみさんの目がぴつと釣りあがつて、ものすごい剣幕で怒鳴るは怒鳴るはで追ひ出されてしまつたのです」

王「それはよくないなあ」。

劉「癩が強いといいますが、最初から近寄りにくい感じの人ではあつたのですけれど、あの怒り方は普通ではありません。あたしもいろいろ経験してきましたけ

れど、あれほどのは滅多にありませんやね」。

王「何人も病人がいて、死んだりもすれば、そりやあ誰だって気が立つだろう。で、その家には何人いて何人が病気になったのかい」。

劉「お家はもともと七人だったのです。ご存知ないですか、ここからずっと馬行街の方に出て、その先のところをちよつと行つて入つたところの孫そんさんです。お役人をしていた旦那様がずいぶん以前に亡くなつたとかで、おかみさんが二人の息子さんと五人の娘さんを大変苦労して育てたと聞いています」。

王「それなら、少し前まで二男がここにきていたあの孫さんだろうか。父親の後を継ぐために、兄さんともども本格的に科擧の受験に向けて勉強すると言つていたけど。私はそこまでは教えられないので、ほかの先生に就いたようだが」。

劉「きつとそうです。おかみさんは、お二人の息子さんが科擧に合格して家を再

興するということ願ってこれまでずっと頑張ってきたと話しておられましたか。ですから、息子さんのことを一番心配されているですよ。それが、とうとう二人の息子さんが揃って枕を並べて伏せるようになってしまったのです」。

王「そういうことなら、心配の余りそなたをさんざんに叱るのも無理なかるうな。おかみさんとはたしか一、二度お会いしたが、すっかりした方で、ただちよつと気性が荒そうな感じがしたが。もつとも、そうでなければ、夫を喪つて一人で子供達を育てるといふのはなかなかできないだろう。で、七人家族だといったけれど、息子が二人で娘が五人ならおかみさんも入れて八人ではないのかい。数が合わないわくないか」。

劉「あたしだってそのくらいの算術はできますよ。初めから話すと、長女さんは数年前に亡くなっていて、四女さんと五女さんは小さいうちに外にもらわれて行

ったそうです。女手一つではさすがに育てきれませんもの。それで、残ったのが、長男と次男と二女と三女です」。

王「だったら五人だ」。

劉「二人の息子さんにそれぞれお嫁さんがいて全部で七人なのです」。

王「で、誰が病気で誰が死んだのかい」。

劉「最初に病気になったのが二男さんのお嫁さんでした。続いて、三女さん、そして二男さんが発病して、二男さんのお嫁さんが亡くなった時点であたしが呼ばれて、最初に三女さんを診たのです。三女さんが快方に向かったので、あたしは本当にほっとしました。だって、最初におかみさんにご挨拶したときに、この家は難しいなと感じたのです。亡くなったお嫁さんのことを『あれのせいでこんなことになってしまった』と、それはもう口汚く罵っていましたから。おかみさ

んとしては二男さんに病気が移るのを恐れて、嫁に絶対に近付くなと厳命して、三女さんに病人の世話をさせていたのです。それで三女さんが次に発病したのですが、二男さんも倒れてしまったので、『嫁が息子を道連れに引っ張っているに違いない。憎らしいったらない』と、そんなふうに言うのですよ。

王「とにかく息子が大事なのだな」。

劉「そうなんですよ。三女さんが回復に向かったのもつかの間で、二女さんがやられてしまったってあつという間に亡くなってしまい、そして三女さんがまた悪くなり、二男さんはよくならず、それだけでも大変なのに、一番大切な長男さんまでもがとうとうとやられてしまったのです」。

王「どんどん悪くなつてしまったのか」。

劉「七人の家族でまだ無事なのはおかみさんと長男さんのお嫁さんだけです。い

まはお嫁さんが三人の病人をこわごわみているのですが、それをいたわるでなく、おかみさんは『なんだって嫁が平気でうちの子が』という感じで、非難がましい目でご覧になるので、何とも気の毒でなりません。

王「私が教えた感じでは、二男はかなり優秀な子だった。息子に望みをかけていただけにおかみさんの心持ちも尋常ではないのだろう。」

劉「あたしだって、おかみさんがあんなふうになるのもわからなくはないのです。でも、あたしはあたしなりに努めたのです。そこらのいかさま医者と違って、実際にたくさんの方を治しているのです。先生だってそうやって起きられるようになったではありませんか。」

王「そなたのお蔭だ。何度でも礼を言うよ。」

劉「別にお礼を言ってもらいたいわけではないのですけど。何もあんな劍幕で、

それこそあたしが病気のもとの疫病神であるかのように追いはらわなくてもいいではないですか。今回の流行り病が悪すぎるのです。若い人がだめなのです。あたしなんぞはこれで何十人も病人を診て歩いているのに、不思議とうつつたりしないのですから」。

王「病気も裸足で逃げるくらいにそなたが凶太いということだろう」。

劉「下手したら、あの家はおかみさんだけを残して若い人は全滅ということにだってなりかねません。そこまですると、あの家には何か宿縁のようなものもあるのではないかなって気もしてきます。だって、何度も言いますけど、三女さんはよくなりかけたのです。それがまた悪くなるなんて変ですもの。いくらあたしが努めてもどうしようもないものがあるんでしよう、きつと」。

王「おのれの腕が及ばないのを柵に上げて、宿縁でございますからあきらめなさ

「いって、おかみさんに言うのかい」。

劉「腕とかの問題ではないのです。宿縁のせいであたしの評判が下がりでもしたら悔しいじゃないですか。いいです、あたしだってもう少し頑張ってみます。先生に愚痴を聞いていただいたので、気持ちを切り替えて、おかみさんのところにもう一回、顔を出しに行こうと思います。また悪くなっていて、怒鳴られておしまいでしょうけど、信用をつなぐには、叱られても叱られても病家を見舞って、一人でも救うよう努める以外にありませんから」。

王「おかみさんだって、昨日は言い過ぎたと思っているかもしれないだろう」。

劉「そうだといいのですけど。あの劍幕は、おいそれとおさまったりはしないように思います。それはそうとして、先生には、新しい薬を煎じてさしあげますから、それ飲んで、お粥を召しあがって、今日はゆっくりおからだを休めておられ

るとよろしいでしょう。夕方には何か持ってまた顔を出しますから」。

夕方と言っていた劉婆さんでございりますが、まだ昼過ぎのうちに、炙り肉と蒸餅むしまんじゅうを携えてやっつてまいりまして、

劉「あら、起きておられたのですか。ゆつくり休んでおられると思いましたが」。

王「寝ているのも飽きたし、しばらく休んでしまった分の勉強をしておかなければと、書物を開いていたところだ」。

劉「まあ、先生がそこまで勉強熱心だったとは、ちつとも知りませんでした」。

王「それはそうだろう、私も知らなかった。今回はもしかして死ぬのかもしれないと少しばかりは私も恐れてな、あれこれ思うと、まだまだ勉強が足りないのが

一番の心残りだと思えて、それで、元気になったらと心に決めたんだ。我ながらまことに殊勝とは思わないかい」。

劉「この前は枯れたようなことをおっしゃっていましたが、そんなに勉強してどうなさるのです。いまから科擧でも受けられるのですか。五十歳の若進士わかしんしとかいうようですし、八十二歳で合格した人もいたらしいですから、それと比べたら、先生はまだまだお若いから」。

王「俗世間の欲と学問は別だ。せつかくこうやって気楽に暮らしているのに、浮き沈みの激しい官界になど、たとえ天子様に頼まれたって入るのはお断りだ」。

劉「天子様がどうして頼むものですか」。

王「学問は、科擧を受けるとか、何かのためにするのではなくて、ただおのれのためにするのだ。かく言う私も、こうして子供たちに教えることを飯の種にする

ようになってから、いわば格好を付けるためにちよいと学問を始めたという、実にいい加減なものだった。ここに通ってくる子供たちの中には、いずれは科擧を受けようというのもいないではないが、ほとんどは商売人になったり小役人になったりして、そのときに役立つようなことを習いたいと思っておる。私はこれで若い時分からいろいろとやってきたから、算術であるとか、帳簿の付け方あるとか、お上に届ける書類の書き方であるとか、世間一般の知恵というものをひと通りは具えている。それがなかったから、大半の子はここにこないだろう。しかし、それだけを教えるてもどうかと思つて、人の道を説いたりもしてきたのだが、どうも浅すぎていけない。今回病氣をしてつくづく反省したのだ」。

劉「はあ、左様でございますか。よくはわかりませんが、何となく先生は大したものだと思いますよ。感心、感心」。

王「ほめられているような気がどうもしないな」。

劉「それはそうと、何かお皿でもお借りできますか。こっちのお皿は店に返しに行かなくてはいけませんので」。

王「さっきからうまそうな匂いがしているが、それを買ってきてくれたのか。すまないなあ。ありがとう、ありがとう。その辺にあるものを適当に出して使ってくれたらいい」。

劉「油がいつぱいのこのお肉の匂いをうまそうとお感じになるのは、確かに病が抜けた証拠でありましょう」。

劉婆さんは棚から器を出して、肉と蒸餅を移します。

王「夕方とか言っつてなかったかい。随分と早いようだけど」。

劉「そうなんですけど、例の孫さんのことで、ちよつとご相談と思ひまして」。

王「また叱られたのかい」。

劉「そうではないんです。ここを出て、すぐに行くつもりだったのですけれど、昨日の剣幕を思うと、さすがのあたしも氣後れして。他の用を二つ三つ先にしてから、どうにか意を決して行ってみたのです。そしたら、おかみさんは昨日とはまるで違って、あたしに飛びつくようにして『今日はきてくれないのかと心配していました』と、すぐに中へと導き入れて、『娘の話を聞いてやってくれないだらうか』とおっしゃるのです」。

王「娘というのは三女のことかい」。

劉「ええ、そうです。三女さんはいったんはよくなりかけのがぶりかえして、昨日の夜中からさらに一段と悪くなって、いまにも死にそうなありさまで、あたしに話したいことがあると。おかみさんがいくら尋ねても何も言わなくて、あたし

でなければというので、おかみさんは、あたしがくるのをじりじりしながら待っていたのです。そうと知っていたら、朝一番に行けばよかったのですけどね」。

王「どうしてそなたにというのかい」。

劉「おかみさんに言えることではないので、あたしだったのでしょうか。それで、三女さんの伏せっている部屋に行きますと、三女さんは荒い息で本当に苦しそうで、おかみさんには『出て行って』とか細かい声で言いましたので、あたし一人だけが残りました。三女さんは、最初はぼそぼそといかにも重病人らしく話していましたが、だんだんと、どうもさほど加減が悪くはなさそうな様子に感じられてきました」。

王「ほう、仮病かい」。

劉「たぶん。で、ほら、今朝あたしが言いましたでしょう、何かの宿縁ではない

かと。二女さんはまさにそれを言い出したのです」。

王「そなたの見立て通りか」。

劉「三女さんは『この病は先に亡くなった姉さんのせいなのです』と。病に苦しみながら伏せていると、長女さんが恨みがましい顔で夢に出てきて、それを見るたびに病が重くなっていくと。とくに昨夜は綿々と恨み言を並べて、それを聞かされてもう苦しくてならないと。その割には、実はそれほどでもないようなのですけどね」。

王「恨み言とはどんなことなんだい」。

劉「長女さんが言うのは、『私は不運にも先に死んでしまい、いまだにきちんと葬られてもいない。生きていたときにも、死んでからも、母に冷たくされて、恨みは増すばかりだ。この上は、母が最も頼りとする二人の弟を私と同じ病で殺し、

ついでに妹も嫁も殺して、母を一人ぼっちにして、苦しめてやる。苦しめて苦しめ抜いてやる』と。それを何度も何度も繰り返したのだそうです。

王「長女も流行り病で死んだのか。それは幾つどころだったのかい」。

劉「三女さんに聞くと、十七歳のときだったとか。ある大きな商人のところに嫁ぐ直前だったそうです」。

王「嫁入り前か。それは不運だったな」。

劉「長女さんが病気になったときに、おかみさんは娘を激しく叱ったんだそうです。肝心のときにどうして病気なんかになってということ。長女さんが死んでからも怒ってばかりいたとか」。

王「そうなのかい。何だか長女が気の毒だな」。

劉「息子さんたちに病をうつされては困るとの思いもあったのでしようし、それ

に、長女さんが嫁入りすれば、これからは先方の家を頼りにできると期待もしていたのでしょう。それがふいになってしまつて怒つたのでしょうか。

王「母としてはそういうことであるのだろうか」。

劉「長女さんはその縁談が嫌で嫌でならなかったのだそうです。家のためだと、おかみさんが決めたのですが、長女さんにはひそかに心に思う人がいたらしいのです。もちろんそんなことは駄目に決まつてましよう。おかみさんが選らんだ相手というの、お金があつて、だけど年は相当にいついて、もう五十を超えていたそうです。女手一つの厳しい暮らしですから、おかみさんとしては何としてでもそこに嫁に出したかつたのでしょうか」。

王「つまり財産目当てかい。先方には嫁にもらつて何か得になることがあつたのかい」。

劉「長女さんは大変な美人だったそうです。若くて美人なら、五十を超えたおじさんにはそれだけで十分でしょう。先生もそう思いませんか。その上、もしも息子さんたちが科擧に受かりでもしたらまことに結構な話でしょう」。

王「そういうえば、おかみさんも人並み以上に美しい方だったな。ちよいと険があるが」。

劉「きれいなだけに怖いのですよ」。

王「長女は嫁に行くのが嫌で病気になったのかい」。

劉「そうかどうかわかりませんが、長女さんは自分の運命を呪い、母を恨みながら死んだのだそうです。そうした忌まわしい亡くなり方だったために、おかみさんは、長女をごく粗末な棺におさめたまま、いまだにきちんと葬ることなくお寺に預けたままにしているのです。きちんと埋葬するには費用もかかりますから、

いまの暮らし向きでは難しいのかもわかりません。おかみさんとしては、せめて嫁入りをすませていればと、返す返すも残念でならないのでしょうか。

王「いまの話は全部三女から聞いたのかい」。

劉「ええ、そうです」。

王「三女はいまいくつなんだい」。

劉「十六、七といったところでしょう」。

王「つまり、長女が死んだのと同じ年頃か。なかなか難しい年齢だ」。

劉「三女さんは、『このままでみんなが姉さんに取り殺されてしまいます。どうしたらいいのか教えてください』と、さもおびえながらあたしに訴えたのです。さつきも言いましたように、病は本当は治っているようなので、これは作り話ではないかと疑いまして、三女さんが何を意図しているのか、それがわからないうち

は下手なことではできないと、とりあえず、『お姉様を手厚く葬ってさしあげるのがよろしいのではないでしょうか』と申し上げておきました」。

王「まあ、嘘であっても、怨念を鎮めるにはそうするのがいいだろう」。

劉「でも、三女さんは『それはだめです。葬るためのお金なんて家にはありません。お金を工面しようと少しでもぐずぐずしたら、その間に病でみんなが死んでしまいます。姉さんの恨みはとんでもなく深いので、葬ったくらいでとけるようなものではきつとないのです』と、激しく反対しました。病人とはまるで思えない勢いでしたので、あたしは『困りましたねえ』と考え込んだふりをして、三女さんが次に何か言うのを待ったのです。すると、『姉さんのせいで今日にもわたしは殺されてしまいます。急がないと兄さんたちも取り殺されてしまいます。どうかして下さい』ときかんに訴えまして、あたしはそれでも『困りましたねえ』

と言うだけになっていると、ぼろりと、とんでもなく恐ろしいことをつぶやいたのです。

王「ほう、何を言ったのかい」。

劉「低く不気味な声で、『すぐに棺ごと姉さんを焼いてしまうしかないのです』と」。

王「そいつはかなりの荒業だな。何かい、二女も気性が荒いのかい。あの二男はおとなしい子だったように記憶しているが、息子と娘では性格が違うのだろうか」。

劉「息子さんたちはおかみさんにそれこそ大事にされていますでしょう。娘さんたちは逆に邪慳にされているので、気性の荒さが表にそのまま出てしまっているのではないのでしょうか」。

王「それにしても、棺を焼くというのはな」。

王先生と劉婆さんが顔を見合わせましたのは、現在普通に火葬を行っているわ

れわれにはわかりにくいことではありますが、古い中国においては、亡骸を焼くというのは最もしてはいけない行為の一つであったからです。

中国の伝統的な死生観として、亡骸は極めて大切にしなければならぬものでした。皇帝の亡骸などは水銀漬けにしてあたかも生きているときと同じような状態を保とうとしましたし、一例を挙げれば、母の棺をまだ埋葬せずに安置している間に隣家より火が出て、火から棺を守ろうとして焼け死んでしまった息子夫婦は孝子の手本として大いに称賛されました。

亡骸の保存状態は、死後の世界でのあり方と緊密に関係していると考えられていました。もしも亡骸の一部分が失われでもしたら、死後の世界ではその部分が欠けた状態でいなければなりません。重罪人が首を刎ねられ、胴体と合体されることなく葬られたならば、死後の世界ではずっと首なしでいなければなりません。

もしも亡骸が焼かれて消滅してしまったならば、それこそ一大事で、死後の世界では身体を持ってない哀れな霊としてさまよい続けなければなりません。死者にとつてこれほど恐ろしいことはありません。

亡骸を焼くのは死者に対する最大の冒瀆で、深い怨恨を持つ者は、仇の死骸を地中より掘り出して焼くということをしました。もちろんこれは法で禁じられ、殺人罪より一段下の刑罰が与えられました。その一方で、宋の時代の少し前から、仏教の影響やもろもろの事情から火葬の風習が徐々に広まり出していました。宋の初代皇帝は、伝統に背くその行為を命令を下して禁じました。宋の国法としては亡骸を焼くのは厳禁でありました。

そのようなわけですから、死者の行為を封じるのに、亡骸を焼いてしまうというのは最強の手段ではあるのですが、重大な犯罪行為ですからおいそれとできる

ようなことではないのでございます。

劉「三女さんが本当は何を目論んでいるのがわからなかったもので、とりあえず『よくよく考えてみましょう』と答えるしかありませんでした。三女さんは『このことは母には決して言わないで下さい』と念を押す一方で、『急がないと私も兄さんたちもみんなが殺されてしまいます』とも言いまして、それからまたいかに辛そうな仕草をして目を閉じたのです。

王「それでおかみさんにはどう言ったのかい」。

劉「まるつきり隠すわけにもいきませんから、長女さんが夢に出てきて二女さんを苦しめているということまでは話しました。それだけおかみさんはもうカーツとなつて、『あの娘か、そうかあの娘か』と吐き捨てるように言うと、『あの娘のせいならどうしてくれようか』と、椅子を蹴り飛ばして、怒りをあらわにしたの

で、あたしはもうぞつとして、『これは病のせいでお嬢様があらぬことを夢に見ただけなのだと思います。お気持ちを穏やかにするお薬を調合しますので、それをお飲みいただければ、おかしな夢も見なくなりましょう』となだめるように言いまして、お薬をご用意すると早々に逃げるようにして帰ったのです。

王「三女はいったい何を考えているのだろうか」。

劉「それがですね、おもしろいことに、孫さんの家を出るなりそれがたちまち知れたのですよ。向こうが知れるように仕掛けてきたのですけどね」。

王「ほう、どうしたんだい」。

劉「門口を出たら、すぐにぱったりと魏^ほ二の兄さんに出合いました。というより、あたしが出てくるのを待っていたのでしよう、向こうからすると寄ってきて、『こちらのお嬢様方のご様子はいかがでしょうか』と、聞いてきたのです。その

瞬間に、『あれっ』と感じました。魏一の兄さんは、先生は知りませんか。この炙り肉がまさに兄さんのなのですが、調理した肉を担いでそこらを売り歩いているのがいますでしょう、ほら、売り声がちよつと小粋で、苦み走つた男前の」。

王「さあて、この界隈の者なら、顔を見れば大概はわかるのだが、名前までは知らないなあ」。

劉「兄さんは、この家は上得意で、いつも世話になつていたので、心配でならないとか、いろいろと言葉を並べて、『日頃の恩返しにもしもあつしにできるようなことでもあれば、してさしあげたいと思つて居るのです』と、妙に力をこめて言うのですよ」。

王「三女が十六、七で、そいつがいい男なのか。少しわかつてきたような気がするな」。

劉「でしよう。それで、あたしはちよつとひっかけてやろうと思つて、二女さんはいまにも死んでしまいそうで、何とかしなければ手遅れになると、かなり大袈裟に言つてやったのです。兄さんは、『これはお嬢様お一人のことではなくて、お家の皆さんのために、何かしてさしあげたいとあつしは思つていゝのです』と、妙に落ち着いた感じで言うのですよ。それで、『勇気のある兄さんのことだから、人助けになるなら、たとえ罪になるようなことだつて、厭わずになさるのではありませんか』と、聞いてやつたのです。兄さんは腕まくりして、『男と見込んで頼まれたなら、あつしは何だつていたしますよ。きつとしてみせますとも』と、格好よく言い切りましてね、それを見て、あたしは兄さんにちよつと惚れ込んじまいましたよ」。

王「何の話をしているんだい。そなたはどうでもいい。そいつはつまり、棺を焼

く仕事を請け負うと、魏二は暗に名乗り出たということになるのかい」。

劉「そういうことでしよう。要するに、魏二の兄さんと三女さんはお互いに気があつて、でも、二人の仲をおかみさんは許しはしませんやね。肉を担いで売って歩くしがない商売人なんかおかみさんは頭っから相手にしませんから。息子さんが科挙に受かれば立派なお役人様でしょう。その妹で、立派な器量も具わつているとなれば、引く手あまたで、将来はどこのいい家のお嫁さんにくらでもなれましょう。三女さんは病気になつて長女さんのことを思い出したのでしょうか。自分も姉さんと同じように思いを遂げられずに死んでしまうのは悔しいと。あたしが診てさしあげて、病から回復できたので、魏二の兄さんと一緒になる手段はないかと考えて、思い付いたのでしよう。そうに違いありません。人間死ぬとなつたら、やっぱり一番したいことをやっておきたいと思ひますでしょう」。

王「棺を焼くという危ないことを魏二がする代わりに、自分たちの仲をおかみさんに認めさせようというのかい。成程、知恵を働かせたな」。

劉「それを自分たちから言い出したのでは、思うようには進みそうにないので、このあたしをうまく使つてと考えたのでしょうか。お二人はなかなかよい目を持っていると思いませんか。だって、あたしはこの通り勘がよく働いて、お二人のことがちゃんとわかりましたもの。口もうまいから、おかみさんをうまく説得してくれると期待しているのでしょう。あたしはこういうのが嫌いではありません。お二人のために何とかしてあげたいとすっかりその気になったのですが、ただあからさまに言うのも何だからと、魏二の兄さんには、『いざというときにはどうか頼みます。また声をかけさせてもらいますよ』とだけ言いますと、『どうかくれぐれもよろしく』と頭を下げて、この炙り肉をくれたのです」。

王「ということ、肉は私のために買ってきてくれたものではなかったのか。もらい物の使い回しか。礼を言ったのに」。

劉「蒸餅の方はちゃんと買いました。それに、この炙り肉は魏一の兄さんが扱う品物のなかではとびきり上等です。あたしの銭では買えません」。

王「で、これからどういう段取りをつけるつもりなんだい」。

劉「そこなんです。何しろあのおかみさんでしょう。よほどうまく話を持っていきませんと。怒らせたら厄介です。きいっとなったら、人の話なんか聞きません。それに、できれば棺は焼かずにすませたいでしょう。そうは思いませんか。先生、どうしたらいいでしょうか。うまい手がないでしょうか」。

王「何かい、もらい物の炙り肉をこつちに回して、私に知恵を出させようというのかい」。

劉「別にお肉で釣ろうというのではないのですが、それこそ、こういうときに先生の学問は役に立ったりしないのですか」。

王「さてな。巷のごたごたというのは存外難しいものだ。我が大宋の昔の偉い宰相殿は『論語』が一冊あれば国が治められると言ったそうだが、それからすると国を治めるのは思いのほか簡単なのかもしれぬ。まあ、私もこういうことは嫌いではないし、世間の知恵は具えているといまも言ったばかりだし、一つ考えてみるとするか」。

王先生はしばし思案投げ首の体でありましたが、おもむろに口を開きまして、王「三女というのは確かにもう治っているのかい」。

劉「あたしの見たところではそうです」。

王「三女が使えるのなら、方術使いの柴さんにちよいと腕を貸してもらったら、

これはどうにかなりそうだな」。

王先生、さて、何を思い付いたのでありませんか。

津々と更け行くとあるお寺の一室。

小さく燃える灯の傍らで、孫さんのおかみさんと老いた尼さんが向き合っています。おかみさんの後ろに劉婆さんと魏二の兄さん。

尼「どうか、そればかりは思い止まっていただけかもしれません。たとえ立派な棺、結構な墓所がご用意できませんでも、仮でありましても、せめて土の中に埋めてさしあげてください」。

母「いいえ、あの娘は私を憎み、復讐の焰ほむらを燃やし続け、このたびの疫病に乗り

て、ついに積年の恨みを晴らそうとしているのです。根元から消し去らない限り、私ども一家は必ず死に絶えてしまいます」。

さきほどから尼さんはずっと説得しようとしているのですが、おかみさんはまったく耳を貸しません。

昼間のうちに王先生と劉婆さんはおかみさんを訪ね、三女との仲を認める代わりに魏二に棺を焼かせるという話を慎重に持ち出しました。二男の先生であった王先生がいれば信用のされ方が違うだろうということであったのですが、おかみさんは聞くや否や、「焼くしかない」と、すぐにも自分で棺に火を付ければかりの勢いで、どうせ病気で死んでしまいかねない三女を魏二にくれてやるくらい何でもないということでありました。二人の息子を助きたい一心なのであります。

寺にきて、おかみさんの勢いは増すばかりで、どうあっても長女を焼かずにお

かないというありさまに、後ろに控える劉婆さんも胆を冷やし、長女もこのおかみさんに似た性格ならば、死後も執念を燃やし続けるということもあながちなくはないと恐ろしく感じたのでございます。

尼「今年は天の運めぐりの悪い年なのであります。かくも疫病が流行り、大勢の人が亡くなっています。この寺にも、連日のように新たな棺が運ばれてきます。病で倒れるのはまことにお気の毒ながらも、あなたさまのお家に限ったことではないのです」。

母「世の中でどれほど病が流行ろうが、よその家がどうであろうが、それは知ったことではありません。うちは、あの娘によって皆が殺されてしまうのです。この母を恨み、何もかも駄目にしてしまおうとしているのです。憎んでも憎んでも余りあります。一刻も早く焼き払わなければならぬのです」。

頑として聞き入れないおかみさんを前にして、尼さんはおもむろに経文を唱え、尼「このようなことを申しましてにもわかにはお信じにならないと黙っておりますが、かくなる上は申し上げることにいたします。お嬢様は三女様の夢の内に再三入ってこられているということでございますが、実は、この庵にも幾度となくお越しになっておられるのです」。

母「何という恐ろしい執心。あくまでもこの世にとどまって恨みを晴らそうというのです。ただちに焼いてしまわねば」。

尼「どうかお聞きください。お嬢様のご執心は確かに尋常ではありません。ご自身の中に燃える瞋恚しんいの焰ほむらがあまりも激しいために、お嬢様ご自身が恐れ慄いておられるのです。どうかして焰から逃れたいと、我が庵室にお越しになって、苦悩を訴えられ、まことにお気の毒にございます」。

母「焼いてしまえば何もかも消えてなくなりましょう」。

尼「お嬢様がお越しになるのは決まって雨の夜。お嬢様のためにお経を読んでさしあげますと、じいっとお聞きになって、夜明けに至って、ほっとした様子で帰って行かれます。さしもの悪縁も御仏のお導きによって必ずや断ち切れるに違いないと私は考えています。どうかどうか、いましばらくお嬢様を見守ってはいただけませんかでしょうか」。

尼さんが深く頭をさげますと、おかみさんはけらけらと笑い、

母「それを聞いて、いよいよ焼かねばならないとわかりました。それこそがあの娘の狡猾さです。御仏の教えを聞くようなそぶりをして、焼かれるのを免れようというのです。騙されて手を緩めたならば、その隙に息子たちは殺されてしまいます。何という悪知恵。断じて許しはしません」。

尼「そうではありません。お嬢様は本当に苦しんでおられるのです。どうかどうか」。

すがりつく尼さんを押しのけ、

母「あの娘のことはこの母が一番よくわかっています。あれは焼いてしまうしかないのです。こうしている間にも手遅れになってしまいます。お蔭ですっかり時間を無駄にしまいました。魏二さん、行きますよ。どうしました。ここにきて怖気づいたのですか。震えているではないですか」。

魏「いえ、震えたりなどは。ただ、こちらの尼様のお話を聞きまして、何やら罪深い気になって」。

母「だったらいいです。そなたを頼りになんかしません。私が一人で片付けます。その代わり娘のことはきっぱりあきらめなさい」。

魏「いえ、それは。あつしは、ご存知の通り、一度口に出したことはきつとする男です。お約束した通りにさせていただきます」。

母「そなたさえちやんとやってくれば、私は言ったことは守るのですから」。

魏「ありがとうございます。どうかあつしにお任せください」。

母「では、棺のある場所に案内してください」。

魏「用意はすつかりできております」。

尼さんがいま一度止めようとするのを、おかみさんは荒々しくはねつけ、灯りを手にした魏二に続いて外に出ます。

時はすでに真夜中、月が沈もうとしています。風はなく、昨夜と比べて寒気が緩み、それだけに何やら生ぬるく陰気な夜でございまして、尼さんをいたわりつつ後に従う劉婆さんは、思わずぞつといたします。

魏二は井戸の脇から竹林に入り、中は真つ暗 揺れる灯りだけが頼りで、葉の擦れ合うかすかな音が気味悪く聞こえます。

竹林よりぽつと出ますと、あたりはさきほどよりも暗さが増し、西の空低くにならずかにぼうつと月明かりが残り、お寺を囲む塀の輪郭が遠くにぼんやりと見えています。踏み出すとじとつと地面に足を取られるような重さを感じます。

魏「どうかここから先はお気をつけください。このあたりは、まとまった雨でも降ると池のようになるところでございませすから」。

魏二はおかみさんの前を照らしつつ歩きます。

母「このようなどころでなら火を使ってもよろしいでしょう。なかなかよい用心ではないですか」。

魏「へえ、今晚は幸いと風もありませんし」。

火事と喧嘩は江戸の華と申します。喧嘩はどうだか知りませんが、北宋の都の開封も冬は風が強くまこと火事早いところでございました。ついながら申しますと、お上への届けなしに夜の屋外で火を使うことは禁じられていまして、火の手が上がると、消火に当たる兵士がどっと集まってくることになっていました。ですから、この夜、寺の宗教行為として火を使うということを、王先生はぬかりなくお役人に知らせておきました。

四人は、じとつ、じとつと、いやな音を立てながら進みまして、魏「いいぞいいます」。

高く掲げた灯りに、薪や枯草を高く積んだ小山があつて、その上に棺が置かれているのが見てとれます。

母「いまいいああの娘はあの中か。執念深く祟った報いをいまに受けるがいい。

さあ、すぐにやっておしまいなさい」。

魏「かしこまりました」。

魏二は灯りを劉婆さんに渡して、細い枯れ枝を二、三本みつくろつて手にします。

尼「どうか、いま少しお待ちください」。

そう言う尼さんをおかみさんは無言で押し返します。

尼「せめてもう一度、お経を読むのだけはお許しください。お嬢様の恨みがいまぎりぎりのところではどけるかもしれせん」。

母「なりません。時を延ばせばあの娘の思う壺。早くやっておしまい」。

魏二は灯りの火を枯れ枝に移します。新たな火が増えて、棺がはつきりと浮かび上がります。

尼「どうか、どうか、今しばらく。お嬢様はいままさに苦しんでおられるのです。ほら、あのお声が聞こえませんかでしょうか」。

母「ええい、しつこいにもほどがありません。いいから、火をつけなさい」。

魏二は火を山に移そうといったんは腕を伸ばしますが、おかみさんの方を振り返って、

劉「本当によろしいのでしょうか」。

母「どうしました。いまさらおじけづくのですか」。

劉「声が」。

尼「ええ、お声がしています。あれはお嬢様のお声です」。

母「声など聞こえませんか」。

尼「お嬢様はお経を唱えていらっしやいます。悪縁より逃れ出ようと苦しみが

いておられるのです」。

母「もういい、私が火をつけます。その代わり、そなたとの約束はなしになりますよ。いいのですか」。

おかみさんが火を取ろうとしましたので、魏二はあわてて腕を伸ばしますが、炎が小刻みに震えます。そこに尼さんがすがりつき、

尼「お聞きください。ほら、いま泣き声に変わりました。お嬢様のご執心は消えかかっているのです。お嬢様のお心がわかるような気がします。お嬢様には、きつとお母様におっしゃりたいことがあるのです」。

母「この母に、あの娘が何をいまさら。いいでしょう、言いたいことがあるのなら、お言いなさい。私は何も恐れません」。

おかみさんが言い放つと、甲高く裂くような泣き声が、誰の耳にもはっきりと

聞こえます。

母「泣いていたのではわからない。娘の夢に出たり、尼さんのところにきたりしないで、この母に向かって言ったらいい。そなたが憎んで余りあるこの母に。そうやってただ泣いているのは、これも時間稼ぎが。もうじれたい。いつまでも泣いているのなら、もう焼いてやる」。

おかみさん尼さんを押しのけて、魏二の持つ火を取ろうとします。

尼「お嬢様にはおっしゃりたいことがあります。棺の内にあるために、言うことができずいるのではないのでしょうか」。

母「だったら棺から出てくればいいではないか」。

劉「蓋が堅く鎖されてお出になれないのではないのでしょうか」。

母「あの娘はこの世の外の者ではないですか。蓋があろうがなからうが関係ない

だろうに」。

尼「夢の内には入れましても、現にここに姿を見せるのは難しかと思います」。

母「そなたの庵にはくるのでしょうか」。

尼「御仏のお導きにすがるうとの一心があればこそでございましょう」。

母「ええい、あれこれと。わかりました。あの娘の言い分も聞かずに焼いてしまったとあとあとまで言われてはしゃくだから、棺を壊して、あの娘をここに引きずり出してやればいいのでしょうか。出てきたあげくにけしからんことを言ったなら、そのときこそ焼いてしまうまでだ」。

おかみさんに命じられて、劉二は棺の蓋を開けるための道具を取りに駆けて行きます。

棺からはずつとすすり泣きが漏れ聞こえ、おかみさんがじりじりしながら待つ

ておりますと、劉二が斧を手にして息荒く戻ってきます。

母「どうせ焼いてしまう棺です。目茶目茶に叩き壊しておしまい」。

魏二は薪の山を上り、劉婆さんは灯を高く掲げ、尼さんはお経を唱えます。

魏二が斧を大きく振りかぶると、すすり泣きがぴたりと止まります。

棺を壊す鈍い音が幾度か響きまして、魏二は斧を置いて蓋板に手をかけ、

魏「これで開きましょう。本当に開けてよろしいのでしょうか」。

母「早くなさい」。

魏二は蓋板を持ち上げます。

中よりすうっと白いものが立ち上り、魏二は思わずのけぞり、蓋板を抱えたまま

まごころがり落ちてしまいます。

劉婆さんの掲げる灯が小刻みに揺れ、棺の上にゆらゆらと女の姿が現れ出ます。

女「千載までも消えぬ恨みはいかなる因果によるものか。母と娘でありながら、かくも憎み合わねばならないとは」。

女は高らかに笑います。

母「何を笑う。泣いたり笑ったりしないで、言いたいことがあるのなら早く言えばいい。何のために棺から出てきたのだ」。

それでも笑い声が続き、

母「ああ、もう耳障りだ。わざわざ出してやったのに、そうやって笑うだけなら、もういい、焼いてやる」。

おかみさんは劉婆婆さんからいきなり灯を奪い、棺に向かって投げつけます。

女は一瞬ひるみ、

女「悪縁よりついには逃れられると思ったのもこれまでか。ありがたいお経の功

徳により、いましも冥府より新たなお裁きが出て、もしも母の赦しが得られ、弟たちの病を治したならば、浄土に行けるとのご沙汰。ああ、それなのに、母と合いまみえれば、やはり募るは恨みの心。燃えるは瞋恚の焰。未来永劫、闇にさまようとも、この恨みは晴らさずにはおられない」。

女は再び大きく笑います。

その下で、枯草から煙がくすぶり始めます。

母「あくまでこの母を恨むのなら、そうするがいい。この母もそなたを憎むまでだ」。

女「六道の輪廻を脱してようやく人として生まれ得たのに、そなたの娘となったばかりに、死してなお憎み合わねばならぬとは。何という悪縁」。

母「かくまで恨まれて、ああ、無性に腹が立つ」。

おかみさんは地面を踏み鳴らします。

女「たとえ私は焼かれても、こうしている間にも、おまえが大事にする弟どもは死んでしまうのだ。そうやって怒っているがいい」。

母「もう許さん。ああ、もどかしい。火はどうしてもっと燃え上がらないのか。もうこうしてはいられない」。

おかみさんは薪の山に飛び乗り、娘に掴みかかろうとします。

娘は棺の蔭に逃れようとし、おかみさんは薪の束に足をとられて倒れます。その瞬間に、ぼっと火が広がります。

母「母がこうして焼かれるなら、おまえはさぞ小気味がよかろう。このざまを見て、嬉しがって、恨みを消すか。どうだ、息子を助けるか。どうだ、どうだ」。

おかみさんは叫びながら火をかぶろうとします。

女「かくも弟たちを。罪にまた罪を重ねる我が恨みの焰の恐ろしさよ。ああ、強い炎ですべてを焼いてしまつてほしい。焼けよ、この身を」。

にわかに一陣の風が起こり、火焰が闇空に高く立ち上ります。

魏二と劉婆さんは急いでおかみさんをひっぱり出し、衣についた火を懸命に消し止めます。その間に、薪の山は炎に包まれ、棺はすっかり焼けてしまいます。

尼「執心とはかくも恐ろしいものか」。

明けの空に念仏を唱えます。

手習いは明日より再開仕り候と、貼り紙を取り替えていますと、ぬつと横に現れ出ましたのは劉婆さん。疲れ切つたような様子に、

王「おや、夕べの首尾はどうだったんだい」。

劉「どうもこうもありませんやね。見てくださいな、ほらこれ。着物の裾が、この通り焦げちまりましたよ」。

王「ほう、棺ではなくて、そなたが焼かれでもしたのか」。

劉「先生はお知恵があるのやらないのやら。とんだ目に遭ってしまいましたよ」。

王「つまり、私の学問は役に立たなかったか」。

劉「途中までは考えて下さったほぼその通りに進んでいたのですよ。まさか、おみさんがあそこまで思い切ったことをするとは。あたしも魏二兄さんももうびっくりですよ。みんなが丸焼けかと、あわてちりました」。

二人は家の内に入って、劉婆さんが事の次第を告げますと、

劉「息子さんのためなら自分の命だっていらぬのですから。娘なんぞは眼中に

なしです。火の勢いがもうちよつとでも強かったら一体どうなったことやら」。

王「柴さんがいたのだろう。火を操るのは得手と言っていたのに」。

劉「そんな術が本当に使えるのだったら、柴先生も諸葛孔明しよかつこうめいの向こうを張って、天子様のお抱えにだってなっていますよ。だって、聞いてくださいな、ここで火が燃えたら一番困るといふときに、強い風が吹いたのですよ。あぶないっただけじゃない」。

王「ともあれ、三女と魏二の件はおかみさんも約束通り認めたくれたのだろう。それだけでもよかったではないか」。

劉「それなんですけど、改めて夕べのは何だったのだろうと考えると、何だかぞつとしちまいますよ。あれは本当に長女さんの亡霊だったのかと」。

王「ほう、どういふことなんだい」

劉「いえね、ついいまさつき、朝一番にあちらに顔を出してきたのです。おかみさんの火傷の具合を診ないといけませんでしょう」。

王「立派な医者としてそれはやるべきだろうな」。

劉「水ぶくれも特に大したことはなくて、薬を塗って、おつつけよくなっていきましよう。それはそれでよくて、長男さんも次男さんも峠を超えた様子で、随分とすつきりした顔をしていて、それもよかったですよ」。

王「いいことばかりではないか」。

劉「いいえね、奇妙なのは三女さんで、おかみさんがおっしゃるには、三女さんの加減が心配だと。あたしはてつきりひどい火傷でも負ってしまったのではないか思ってお見舞いしますと、火傷なんぞはこれっぱかりありませんで、妙にやつれた感じで、『とんだご迷惑をかけてしまつて申し訳ありません。気が気でなか

ったのですが、どうすることもできなくて』と頭を下げられて、それから変なことを言い出されたのです。『昨夜はお約束の時刻に行こうとしたのですが、にわか金縛りに遭ったみたいになつたく動けなくなつて、この家から出かけることはおろか、この寢床から離れることも、ひどいときには口をきくことさえもできなかったのです。一晩中苦しんで、ようやくいまになつて少しばかりものが言えるようになったところなのです』と。実におかしいでしょう。

王「それは何かい、三女はずっと家で伏せていたと言つのかい」。

劉「後で長男さんのお嫁さんに聞きましたも、三女さんはずっと寝ていたと言つてはありませんか。三女さんがおっしゃるには、『きつと姉さんの焼き餅です。私だけは魏二さんとの仲を認められるのが、姉さんとしては許せないでしょう』と」。

王「ははあ、孔子様は、怪力乱神を語らずとおっしゃつたが、死者を蘇らせる妙

な筋書きを作ってはみたものの、私にはまだまだ勉強が足りないということであ
ろうかな」。

劉「あたしはとんでもなく恐ろしいものを見てしまったのでしょいか」。

王先生と劉婆さんとのやりとりはこの先も続いていきますが、昔は不思議なこ
とがいくらでもあったということ、今日はここまででございませう。まことにご
退屈さまでございませう。